
魔王降臨伝 未知の大陸

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王降臨伝 未知の大陸

【Nコード】

N8690E

【作者名】

imaiwa

【あらすじ】

魔王はある日、空間の歪みに興味本位で手を突っ込むと、異質の世界へ飛ばされてしまった。

（前書き）

連載候補のテスト的な短編です。

俺は魔王。ゼームス大陸を支配し、全ての生き物の頂点に君臨していた。

しかし、ある日、怪しい空間を見つけて、そこに興味本位で手をつっこんだせいで

何故か今、変な世界に立っている。

ここの奴等の言葉は分かるんだ。少し会話を交わしたんだ。道端に寝てる汚い人間とな。

「おい、おまえ！ここはどこだ？」

「あん、なんだこいつ、変な格好しやがって」

「良いから、さっさと質問に答えろ！」

そいつがあんまり生意気な口調で俺に溜め口聞くもんだから腹に2、3回蹴りを入れてみた。

すると、そいつは血反吐はきながら横倒れる。

「もう一度聞けど、ここはどこだ？」

「×市です」

「国の名前か？」

「いえ、国は日本と言います」

日本か、知らぬ国だな。

俺は男から聞きだした後は、そいつを捨て置き
堅い石の地面が続く道を歩き始める。

取りあえず、どうしようかの。

なぜか、この街の連中は俺の姿を見ると、珍しそうに大きく眼を見
開いて

横目でちらちら見やがる。

俺の姿が珍しいらしい。

見られるのも、嫌気がさしてきたので、変身でもするか。

「メタモ！」

魔法を唱えると、俺はさっき場所を聞いた汚い男へと姿を変えた。
臭いな…。

これはたまらない…。

もう少しましなのと変わろう。

お、変な金属製の輪が二つある乗り物？に乗った若い男が前を横切
るぞ。

あいつに代わろう。

「メタモ！」

うん、こっちの方がまだましだ。

清潔だし、体も引き締まっている。

まあ、元の体ほどじゃないがな。

さてと、この後どうしようか。

困ったな、こういう時はヘルダイスを使うのがいいかもしれない。

『ヘルダイス』

直訳すると地獄のサイコロだ。

これはそんじゃそこらのサイコロとは違う。

強い魔力を帯びた、魔族の宝物の一つだ。

これを地面に転がし、出た目の表面を頭にこすり付けるとこれから何をすべきか、イメージが頭の中に流れ込むんだ。とても便利な品物だ。

ん？ワシが堅い地面に胡坐を掻いて、サイコロを転がそうとした時左の方から何か猪みたいに突進してくるものがいた。

なんだあれは？金属の箱物？

それはこちらに向って目障りな音を何度も投げかけてくる。良く見ると、その中には人間が乗ってるようだ。

箱物から顔をだし、何か言っているな。少し話を聞いてみようか。

「こら、てめー道路の真ん中で座ってんじゃねーよ」

「道路？」

「そうだよ、さっさとどけよ！」

どうやらこいつは、道路という場所に俺がいるもんだから邪魔だと言っているみたいだ。

人間が俺に命令するのか？

生意気な奴め。少しいたぶってやるか。

「おい、お前」

「口が過ぎるぞ」

「だからーどけよー邪魔だつて」

俺は無言で箱物に手を突き刺し、中に入っているごちゃごちゃした鉄の埃みみたいな物を抜き取ってやった。

手になにか湿ったものが滴り落ちてくる。

そいつはそれを見て、恐怖を顔に滲ませ、後ろに体を仰け反らせていた。

手に持っている物を投げ捨てると、俺はまたその場に座り込んで、ダイスを振ることにした。

ダイスは手から転がり落ちると、緑の星マークを表に顕した。

それを手にして、額に当てると、イメージが滝のように流れ込んでくる。

女……。茶色い髪をした女と、小汚い部屋で一緒に住んでいる!?

どういうことだろう。この女を嫁にでもするのか?

しかし、こいつどこににいるんだ?

取りあえず探すか。女を。

魔法を解いて、元の姿に戻る。

俺は立ち上がると、そのまま浮き上がり、空からイメージに出てきた女を

探し始めた。俺の目は標高2500mの高さからでも、地に歩くネズミの姿まで

確認できるほどの視力を備えている。女を捜す事など造作もない事だ。

「見つけた」

女が立っている場所に、急降下すると、足からふわっと地に舞い降りた。

俺を見て特に驚いた様子も見せない。

話しかけてみるか。

「おい」

「あら、魔王ちゃんじゃないの」

「へ？」

「あんたもこっち来ちゃったの？」

俺は不覚にも動揺してしまった。

全く見知らぬ世界の見知らぬ女に、正体を見破られちゃんづけで呼ばれたんだ。

少し顔を陰しくして女に質問を投げつけてみる。

「おい、馴れ馴れしい奴だな、お前」

「何者だ？」

「私？私はゼームス大陸のリアン城の姫よ」

「え、お前まさか、ソフィア？」

「そうだよ」

俺は開いた口が塞がらなかった。

散々ゼームス大陸で嫁にしようと、追い掛け回してた姫がこの世界に変な姿でいるのだから。

「魔王ちゃん、うちおいでよ」

「困ってるんでしょ？」

「……」

行くか…。

俺は静かに姫に向き直り頷くと、後を付いていくことにした。
細い道へと姫は入り込んでいくと、やがて古びた汚い建物が眼前に現れた。

そこにある鉄の階段に上がっていく姫。

細い通路沿いに青い鉄の扉が視界に入る。

姫はその前で立ち止まると俺に言った。

「ここ私んちよ」

「……」

姫ともあるう者が、こんな小汚い場所に住んでるのか？

いや、中は思ったより広く、豪華絢爛な家具が置いてあるはずだ。
鍵を扉に差し込むと、姫が俺を招き入れる。

入った最初の印象を言おう。

狭い、臭い、暗い。

…。

本気でここで住んでるのか？

姫…。

落ちぶれたな…。

「魔王ちゃん、どうせ行くあて無いでしょ」

無いっちゃ無いが。

「ここで一緒に住もうよ」

「お前とか？」

「そうよ」

姫は茶色い髪を手で摩りながら、俺を優しく見つめてそう言ってきた。

「ふむ、良いだろう」

姫と魔王はこうしてここで何年も過ごす事になるがその後の物語はいつか誰かが語ってくれるに違いない。

F i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8690e/>

魔王降臨伝 未知の大陸

2010年10月28日07時43分発行